

2) ウツセミカジカの養殖 Ⅲ 沖曳網で漁獲されるウツセミカジカとその蓄養殖

水谷英志

【背景・ねらい】琵琶湖の固有種ウツセミカジカは、漁獲されても雑魚扱いされていたが昨年までの研究成果から、漁業振興上の新魚種として注目され有効に利用されつつある。そこで、本年は沖曳網で漁獲されるウツセミカジカの体型変化と漁獲量を把握し、大量飼育の可能性を検討した。

【成果の内容・特徴】①、93年12月から95年2月までに沖曳網で漁獲され、10%のホルマリンで固定したウツセミカジカの体型、生殖腺重量等を測定した。また、94年11月から95年1月までの漁協における、沖曳網による漁獲量を把握した。漁獲される本種の全長組成は年により異なり、93年12月から94年3月は60mm以上の個体が多く、尾数では85%近くを占め、60mm以下の個体は少なかった。しかし、94年10月から95年1月は60mm以下の個体が半数以上を占めた。全長組成の月別変化は認められず、10月から翌3月までの間は同様な組成で推移した。また、性比は年、月による違いはなく、常に雌が多く、雄は1/4～1/5程度であった。生殖腺係数(GSI)は60mm以上の個体で平均して見ると、10月から翌2月にかけて徐々に値が上昇するが、バラツキが大きく10月の時点でかなり高い値を示す個体も認められた。漁協で漁獲され集荷された量は、11月31.5kg、12月179.2kg、翌1月55.5kg 合計266.2kgで、その約1/4の66kg前後が60mm以下(平均体重1.6g/尾)の個体であった。漁業者の出漁日数あたりの漁獲量は、11月291g/日/隻、12月323g/日/隻、翌1月210g/日/隻で、3ヵ月の平均では264g/日/隻となった。この漁協では86隻が沖曳網漁業に従事しており、全て集荷されると一日約23kg(約7,000尾)の漁獲となる。②、94年4月に沖曳網で漁獲され、漁協で蓄養していた本種43kgを5月末に水試に輸送し、そのうちの36kgについて飼育養成した。飼育密度は2kg/m²～4kg/m²とし、4面の水槽に分養した。飼育は翌1月中旬まで行ない、冷凍スジエビを一日当り魚体重の10～13%与えた。その結果、平均14.7g/尾の個体は38.2g/尾に、6.8g/尾の個体は25.6g/尾に、4.0g/尾の個体は22.2g/尾に成長し、カジカの商品サイズと云われる10g/尾には、小さな個体でもほぼ4ヵ月の飼育で到達した。しかし、生残率は低く飼育してから2ヵ月の間に大量に斃死した。8月以降は安定し、最終的には50%前後の成績となった。この斃死は輸送した当時からの白点病、カラムナリス病等によるもので、生残率の低下はその対応に遅れたためである。

【成果の活用面・留意点】沖曳網で漁獲される本種は、雌が多いことと体型にバラツキがあることから、選別して飼育、販売する必要がある。また、量的にカジカ市場の流通を上回ることは必至であり、新たな加工利用の研究や販路の開拓も考慮しなければならない。

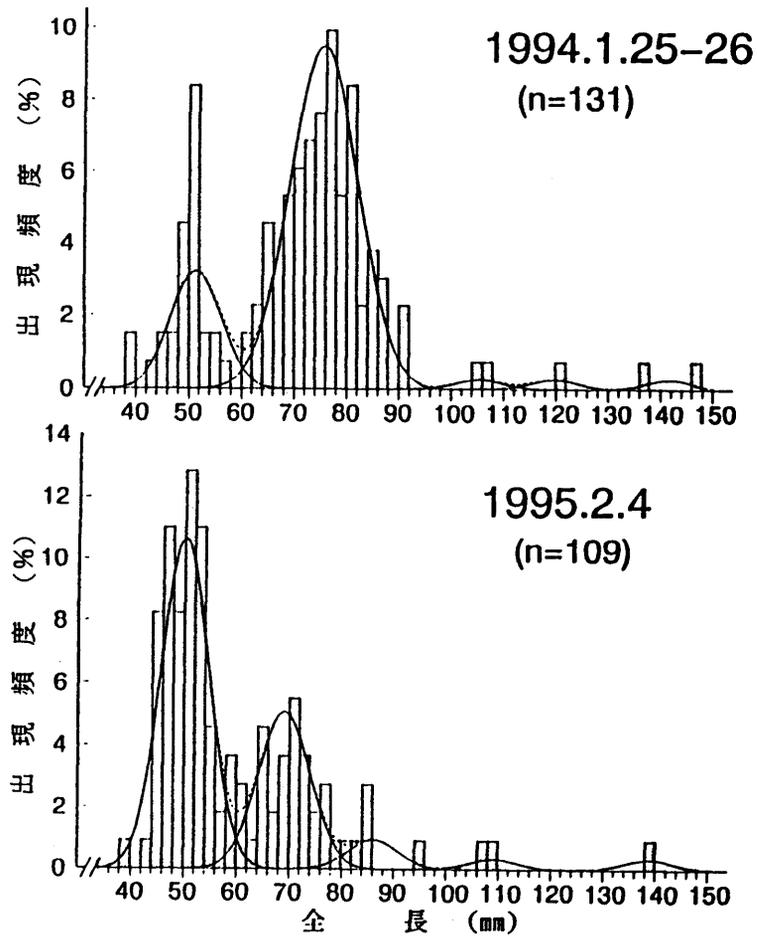


図1 沖曳網で採捕されたウツセミカジカの全長組成

表1 沖曳網で漁獲されたウツセミカジカの養成

試験区	面積	開始日 94年6月8日			取上げ日 95年1月12日			
		放養密度	放養尾数	平均体重	取上げ尾数	取上げ重量	平均体重	生残率
A	0.8	4.0	500	4.0	491	10.9	22.2	19.0~50.2
B	2.5	3.2	1,260	4.0				
C	2.5	3.5	580	14.7	280	10.7	38.2	48.3
D	8.0	2.0	2,300	6.8	1,113	28.4	25.6	48.4

※94年10月14日にA区をB区に収容する。